

中国で日本語を教えて

〈中国〉

松浦 照子

私のみた
海外の大学事情

二〇〇一年九月から二〇〇二年八月まで（実際には夏休みのため七月まで）の一年間、私は中国浙江省にある浙江大学へ日本語を教えに行った。これまでの私の経歴は、日本人に日本語を教えることであった。誤解のないようにいえば、国語教育の分野と

言ってよいだろう。国語（日本語）について研究しながら、大学の国語教育（日本語を対象とした言語教育）をしてきた。しかし、一方で、外国人に日本語を教えるという事に大きな興味を覚えていたため、機会があったらぜひ実践したいと思っていた。そこへちょうど浙江大学外国語学院の主任教授と知り合うことがあって話がまとまったわけである。話がまとまったあと、実現にこぎつけるまでにはまだいくつかの紆余曲折があるのだが、ともかく、セメスター制を取っていないわが校では九月からの一年間という前例のない研修期間を利用して中国へ渡ったわけである。

私が行った浙江大学は、上海から高速道路を車で二時間半ほどのところに位置する、浙江省の省都、杭州市にある。緯度は鹿児島くらいで温暖な土地だ。とにかく雨が多く、車窓から眺めると豊かな田園が限りなく続く。あるとき気づいたのだが、農道、あぜ道がない。その代わり運河が張り巡らされていて、人も物も船に乗って行き

来するのだろうか。そして日本の田畑には休日以外は人はいないが、中国にはいつも人が出て何かの作業をしている。そんな中を二時間ばかり走ると急に大きな街が見えてくる。超高層ビルが立ち並ぶ大都市杭州市だ。

浙江大学外国語学院日本語学科

私が教えた大学は、浙江大学と言って、総合大学としては中国第二位の規模だということだ。四年程前までは四つに分かれていた大学が統合されて大きくなった。外国語学院は旧杭州大学である。全体の規模は驚くほど大きく、学生数も多いのだが、私の関係した日本語学科は少人数教育が徹底している。九八年入学生（四年生）のクラスが二十一人（中に一年間の日本留学から帰ってきた学生が戻って四年生をしていた）^(注)、九九年入学生が二十五人、二〇〇〇年が二十一人だった。

^(注)彼が留学した当時は単位認定の制度がなかったため、日本での習得単位が中国

1年	月	火	水	木	金
1	精読	精読	精読	パソコン	精読
2	第二外語			精読	第二外語
3	大学生修養				体育
4	大学生修養				

2年	月	火	水	木	金
1	精読	精読	精読	精読	会話
2	第二外語	体育	聞き取り	閲読	精読
3			哲学	第二外語	科学社会論
4			哲学		
5				物理社会論	

3年	月	火	水	木	金
1	精読	作文	精読	視聴力	文学史
2		翻訳	新聞購読	日本概説	精読

4年	月	火	水	木	金
1	ビデオ鑑賞		日語概論		
2		精読	古文		精読

* 網掛けは担当科目。この時間割は1年から3年の分は前年のものなので、私
が実際に使った時間割ではない。

の大学で認定されなかった。そのため五
年目の在籍となっていた。現在では単位
互換制度が整い、四年間の在籍で卒業で
きるようになっていた。

彼らの履修科目は驚くほど少ない。ちな
みにある年の時間割を紹介しよう。
一限目は朝八時に始まる。一コマは九十

分なのだが、四十五分毎に五分間の休憩が
はさまれる。一限の終了時間は九時三十五
分となる。十五分休憩があり二限目が始ま
る。九時五十分から始まった授業は十一時
二十五分に終わる。午後は十三時三十分開
始なので、二時間の休憩がある。その時間
の使い方については学生生活のところで述
べるが、九十分を四十五分ずつに分けると
いうのはなかなか効率的でよく考えられた
システムだと思う。特に、外国語学習のよ
うに緊張を強いられる科目では一方で緊張
を解くことも必要であると思う。

私の日本語授業

私が担当した科目について説明しよう。
時間割の中に最も多く見られる精読という
科目は、日本語テキスト講読といった性格
のものだ。一年から三年まではほぼ毎日開
講される。徹底的に日本語の文章を読むわ
けだ。文章は高等学校の国語Ⅰの文章から
とってあるものをイメージするとわかりや
すいだらう。語句の解説、文法的な説明、

用例と解説など、親切に編集してある教科書を使う。単元ごとに練習問題がついており、それによつた課外読み物が本文と同じ分量で載っている。その一つの単元を一週間で読み終わる。

学生たちの日本語能力の進歩は驚くばかりだ。大学での学習だけではないだろうが、学生たちは三年生の十二月初旬に実施される日本語能力検定試験でほとんどが一級に合格する。九月に学期が始まるのだから、日本語を学び始めて二年と三カ月経つただけである。念のために、学生たちは大学に入ってから初めて日本語の学習を始めたものばかりだ。中国では省によつて高等学校で日本語を教えているところもあるが、浙江省では行われていない。ちなみに学生は全国から来ることができるのだが、ここでは省内の学生が大多数を占めていた。

ビデオ鑑賞

そのほか、四年生に教えた科目ではビデオ鑑賞と古文がある。まず、ビデオ鑑賞の

授業について述べよう。ビデオは日本事情といった性格が強く、日本語の聞き取り能力も補うものだ。実のところ、この教材選びが大変でまったくも楽しいものだった。学生たちが知っていたのは日本は、今の日本の若者の実態や考え方であり、正直言

って私が隠しておきたいのもそれだ。地べたに座り込んでしゃべり、スナック菓子の袋をそのまま捨て、携帯でしゃべり、ヘルメットを首にかけてバイクに乗っている若者たちを、これが日本の若者だと見せたくない。そんな若者ばかりでないことはわかっているつもりだけれども、映像が捉える日本の風景の中にはそんなものが圧倒的に多い。それを承知で正面から取り上げて誤解のないように彼らに伝えるのは骨の折れることだ。避けて通りたいものだと思った。その意味では準備不足のため取り上げることはできなかつたけれども、この授業ではおもしろい発見もあつたのでいくつか紹介したいと思う。

ビデオは日本の風景、歴史、文化、人間

像が描かれているもので、日本語ばかりでなく日本全体を学習するためのものだということだ。おもしろかつたけれども学生たちには気の毒だったものを一つ紹介しよう。それは野球の実況中継だ。野球は日本人なら見たことがあるはずだ。それに対して中国ではほとんど知られていない。学生たちはプレーする人数もルールも知らなかつた。敵と味方に分かれており、最初位置についているのは守備についている味方ばかりであり、ベンチから相手チームの打者が出てくることも画面を見ただけでは判らなかつた。それに対して日本では野球は国技ではないけれど(相撲が国技だということだが、競技人口としては野球のほうがふさわしいと思う)、ルールは知っているし、プレーしたこともある。それに新聞のスポーツ欄の大半は野球に費やされている。また、高校野球についていえば郷土の代表として甲子園大会に出場し、日本中が熱くなる。もうこうなると一スポーツというだけでなく、文化としての野球という位置付け

もできるのではないかと思った。そこで高校野球の一試合を見た。しかし上記の理由から、まず画面に展開される映像を元にも、ルールを説明することから始めなければならなかった。球場の大きさ、守備陣の配置、投手が投げたボールを打ったら一塁へ走ること、取ったボールを一塁へ投げる前にベースに走りつくことができたならその場にいられること、次に二、三塁を周って本塁に帰って来たら一点が入ることなどを説明していたらあつという間に九十分が経ってしまった。気の毒だというのは次の理由である。実況で聞こえてくるのはアナウンサーの早口の声と、必ずしも発音が明瞭とは限らない解説者のコメントだけだと言ふことだ。場面に即した実況解説はしているのだが、話している人の表情がない。それに比べるとドラマは怒っているか笑っているかが目でもわかる。外国語を聞き取るための情報量が格段に多いのである。四年生の授業だから、また、彼らはみな日本語能力検定試験の一級を取得しているのだからとは

いっても、教材としてはかなり難しいものを取りあげてしまったのだった。

彼らの反応でおもしろかったのは時代劇で黒沢明脚本の『雨あがる』を見たときだ。全体を見せ終わるといつもポイントチェックをする。日本語学習として聞き取りができているか、正確に理解しているかを確認するとともに、感想なども書いてもらった。その最後にこんな質問をした。映画の最後で殿様は馬に乗って主人公夫婦を追いかけるが、そのあとどのように展開すると思うかというのである。この作品を簡単に紹介する。江戸時代、剣術に秀でた主人公は、藩の剣術指南役などとして御家人を目指しているが、この藩でも長続きしない。職にあぶれて妻と二人で旅をしているとき、長雨が川が渡れず、宿に足止めをされてしまう。そこで貧しい人々のすきんだ心を見るに耐えず、賭け試合をしてしまう。そのことが元でせっかく決まりかけた仕官の口もだめになってまた旅に出るところを、物分りのよい殿様が主人公を引き止め

るために馬で追いかけるという所で終わっているのである。描かれていないので答えは一つとは限らない。しかし多くの日本人は主人公はもう二度と仕官はしないで一生を過ごすという理解するだろう。ところが彼らの反応は違った。『雨あがる』というタイトルから考えて、仕官でできなかった雨模様的人生から、雨が上がって人生の活路が開けた、よき理解者を得てその藩で幸せに暮らしたというサクセスストーリーなのだという答えが大多数を占めた。これは今の中国のものの考え方、価値観を反映しているものとして興味深い。一国二制度で、共産主義政治体制の中に資本主義経済は浸透し、人々は経済的な向上心に燃えている。欲しいだけ食べ、きれいな服を着、立派なマンションに住み、豊かになりたい。人々が豊かになることは国が発展することだ、個人の欲望を満たすということに罪悪感はなく、それが国家の繁栄と結びつくと考えている。一言で言えば競争社会だということだ。その価値観からすると、武士は食わ

ねど高楊枝という生き方は想像しにくいのだろう。この学生の反応に対して、どう指導すべきかについて迷った。中国人の日本語学科の先生と相談をした。確かに描いてはいいことだけれども、貧乏生活を続けることが日本人の理想像としてありうることを理解させて欲しいということだった。

いつもなら、一つの作品を見終わって感想を交換したら次の作品へ移っていくのだが、この会はもう一度話し合うことにしたのだった。経済的な豊かさを獲得した日本人は、その代償として置き忘れたものに気づき始めた。日本の知識人たちはそのことを多く取り上げており、受け取る側も、真の豊かさとは何か、物質的ではない豊かさがあるのではないかと考え始めているということを話した。現在の底なしの不況の中では物質的な豊かささえも求めようにも求められないけれども。

このほか学生たちに好評だったものには、『就職戦線異状あり』の、学生たちが進路選択に当たって悩む姿を描いたもの

や、『やまとなでしこ』で、貧乏を嫌い金持ちと結婚したがるスチューワーデスを描いたものがあった。

古文(古典文法)

古文(古典文法)では大きな驚きがあった。もともと日本の高校生などに古文を教える場合、たとえとして古文は外国語のよなものだということがある。そして今回指導した経験からすると、外国語をマスターするすべを知った学生にとっては日本語の古典文法も楽にマスターすることができるとのことだ。彼らはもう古語辞典を片手にどんな古典作品も読みこなすことができるだろう。深く鑑賞するということはできなくても、そこに書いてあることを現代日本語に置き換えることはできるようになったのである。

しかし、外国人に対して日本の古典をどう教えるか、何のために教えるのかということは大きな前提問題である。というのも、学生たちの生の声からは、この科目の意義

に対する疑問が窺えたからだ。大多数の学生たちにとって日本語学習の目的は現代日本語を身につけて、将来の役に立てるためというものである。観光客を相手に通訳をするとか、貿易関係の商社に勤務して中日貿易に携わるために日本語を勉強している。だから日本の古典に関する知識は要らないと思ってしまう。コミュニケーションの相手である日本人の側にも古典に対する価値観は低く、重要視されていない。このような状況の中では外国の大学で古文を教える意義をみつけるのは難しいといわざるを得ない。ましてや学生に納得させるのは至難の業である。このようなわけで、教材選びから迷ってしまった。結局、百人一首を主教材にした。これなら日本人の多くが高校でも暗誦させられた記憶があるものだし、まあ話の中にも出てくる可能性がないではない。別の意味からは日本人の自然観、恋愛観を知るのにもよい教材であることは言うまでもない。それに、古典文法の法則も一通り説明することができる。カル

夕の実物も見せ、上の句を読んで下の句を取るというカルタ遊びもした。そのほかには、枕草子や土佐日記などの冒頭などを取り上げた。先にも述べたが、学生たちはこれらの文章を読みこなすことができる。そして作品に見られる作者の、日本人の考え方、感じ方を理解したことと思う。ともかく、実用的な言語能力を身につけることができる。それは中国に限ったことではない。そのような中で日本をより深く理解したいという学生は、伝統的な日本文化、価値観、一言で言えば日本的なものについて興味を持っているのも事実である。今の日本人を形成してきた源流にさかのぼってみたいという欲求がある。それに答えられる内容を提供すべきだと思う。

印刷事情

さて、中国の大学では印刷事情が日本とかなり異なる。紙資源が豊富ではない。それはいろいろな場面で驚きとなる。まずテ

キストの紙質に驚いた。ざら紙を糊付けしたようだ。表紙も少し厚みがあるが紙質は悪い。学生たちは毎日熱心に予習復習する。そこでテキストは瞬く間に端からめくれ上がり、ぼろぼろになる。大学の売店に売っているノートの種類も貧弱なものばかりだ。五枚から十枚ほどの紙が半分に折って真ん中をとめてあるものだ。それを学生たちは隔々まで使って真っ黒にする。授業で使うプリントも不便だ。印刷室には人がいて作業をしてくれるけれども有料だ。無料であるためには遠くの建物にある教材課へ行って、本の場合はページ数と学生数のチェックを受けて証明書をもらい、さらに別棟の印刷室へ持って行って頼む。書いていて思い出したが、授業には正規の学生に混じって聴講生が何人か受けている。彼らの分は印刷してくれない。経費の出所が違うのだろう。彼らは自費でコピーするしか手立てはない。そこにはやはり人がいて自分で印刷することはないのだけれども、やたらに面倒だ。定期試験の問題用紙と答案用紙の

印刷はやはり別の場所だ。階段しかない八階建ての図書館の四階へ行く。そこにはやはり担当の事務官が常駐している。人件費の節約よりも、紙資源の節約のほうが大切なのだろうか。

私の勤務校では学生課の落し物預かり所にいつもテキストが数冊ある。立派な装いで、手垢のひとつもついていない。学生たちはルーズリーフをおしゃれに抱えている。ブランド物の手帳をバッグに入れる。大学の体制もかなり違う。私は授業に使う印刷物は自分で印刷する。機械に弱いから失敗して紙を無駄に使うこともないではない。しかし教務課の事務の人は私たちの授業のための印刷をしている余裕はない。人件費がぎりぎりに抑えられているから、私たちは当然のこととして機械と格闘している。欠席届も紙の切れ端ではなく、一枚の紙を使いきちんとした形式で書けと指導する。状況が変わると、指導する内容も正反對になるのかと感慨深い。

学生生活

先に授業のところでも触れたが、授業は朝八時に始まる。その時間には教師は教室にいて、定刻に授業が始まる。中国の朝が早いということを知ったことのある人もいると思うが、冬などはかなりつらい。私は大学近くの宿舎に住んでいたからその苦痛はなかったけれど、友人などは市の中心部を抜けてくるのでかなり大変らしかった。

学生は学内の寮生活が基本だ。学内には生活の基本的な施設がそろっている。郵便局、銀行、スーパーなどがある。寮は六人から八人部屋で自炊の設備はない。そこで食堂は当然学生たちの三食を引き受ける。万頭や揚げパン、粽などで朝食とする学生が大勢だ。寮の建物から教室まで人波が押し寄せる。授業の始まる二十分前には着席して講読の授業の勉強をしている。構内の中央に芝生広場があるのだが、そこでテキストを暗誦している学生も多い。学生は

寮の部屋を出て空き教室で勉強する。部屋へは寝るために帰る感じだ。先に昼の休憩が二時間あると書いたが、その時間を昼食と昼寝に当てる学生は多い。午後の授業にはリフレッシュして出てくる。

こんな学生たちを見て、やはり日本の大学生の姿を思い浮かべる。大学生の親は大変だ。アパートを借り、パソコンにオーディオ、テレビに冷蔵庫を買い揃える。中国では誰も、一つも持っていない。もつとも八人部屋では置く場所もない。私物はベッドの上に並べており寝返りを打つこともできない。パソコンはインターネットカフェを利用する。それでもよく勉強する。勉強するための環境を整えるとはどういうことなのだろうか。深く考えさせられた。

振り返って

帰国してから四ヶ月が経った。この間何種類かの入学試験があった。AO入試といって、双方向からの情報伝達によるものも導入されている。入学までのプロセスを大

切にするものと評価されるだろうが、研究とはなかなかつながらない時間を使わされる。そんなことにも慣れてきたころのころだ。そこで思い出したことがある。日本では国立大学でもある程度はセンター試験のために入試業務をこなすのだろうが、中国では一般の大学教員はまったく入学試験にかかわっていないようだ。また、彼らには研究室もない。あったのは学科に一部の控え室だけだ。机が五台ほどあった。教員は十二人である。だから、授業が終わったら大学に居場所がない。みな自宅へと帰っていく。今度新しく郊外にキャンパスが移転したと言う。しかし、研究室が整ったとは聞いていない。大学の中に居場所があつて、いろんな会議に出て、学生の受け入れに責任を持ち……。大学の構成員としてわずらわしいと思つてこなしてきたことが、なんとともいとおしく思われるこのころである。

まつら・てるこ

名古屋短期大学